

浪江の こころ通信

• 第14号 •



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

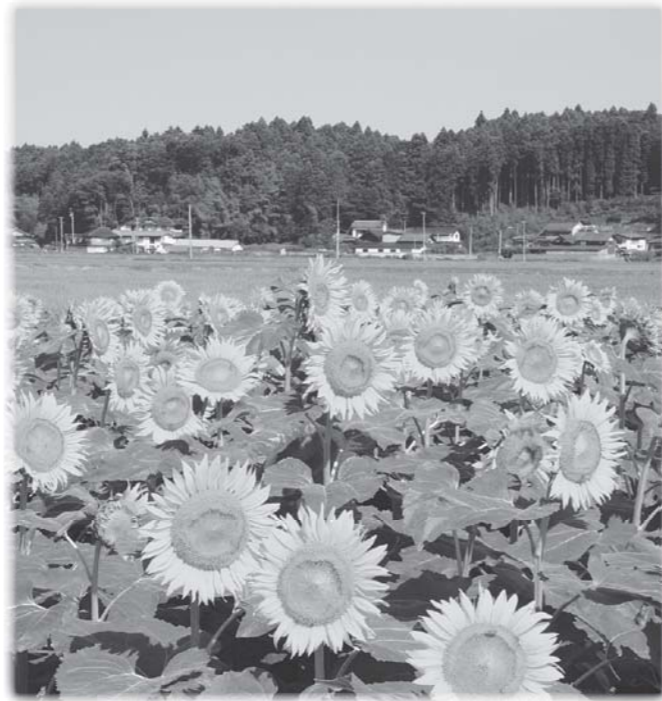
こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第14号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261



NPO法人フレンドシップ・コンサート復興応援プロジェクト ウーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団被災地応援ツアー

ウーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団コンサート 無料招待

東日本大震災からの復興支援のため、国際的に優れた音楽芸術の鑑賞機会を提供し、希望と活力を与えることを目的として、二本松市と二本松教育委員会が主催するコンサートへご招待いただきました。チャイコフスキー国際コンクール優勝などの経歴を持つメンバーが音楽で希望と勇気を与えます。当日は、事前に配布される整理券が必要となります。皆さまのお越しをお待ちしています。

- ▷日時 10月20日(土)
開場 15時 開演 15時30分
- ▷会場 二本松市安達文化ホール
(二本松市油井字瀧石1-2)
- ▷入場料 復興支援のため無料(整理券配布)
- ▷整理券配布開始日時
9月20日(木) 8時30分~
(なくなり次第終了です。)

- ▷整理券配布場所
 - 二本松市教育委員会文化課(市役所3階)
 - 二本松文化センター
 - 安達公民館 ●岩代公民館 ●東和公民館
- ▷演奏メンバー
 - ヴァイオリン: ダニエル・ゲーテ
(ウーン・フィルコンサートマスター)
 - チェロ: グスタフ・リヴィニウス
(チャイコフスキー国際コンクール優勝者)
 - ピアノ: ウォルター・デラハント
(チャイコフスキー国際コンクール特別賞受賞者)
- ※未就学児のご入場はご遠慮ください。
※会場の駐車場に限りがありますので、会場へお越しの際は公共交通機関をご利用ください。
また、お車でお越しの場合は乗り合せ等ご協力願います。
- ▷主催 二本松市・二本松市教育委員会
- ▷後援 浪江町教育委員会、福島民報社、福島民友新聞社、福島中央新報社

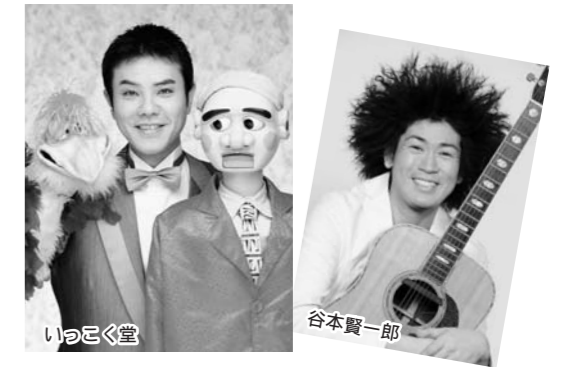
問 浪江町教育委員会 Tel 0243-62-0304

がんばろう
福島!

いっこく堂スーパーボイスイリュージョン in 福島 無料招待

浪江町民限定で無料のご招待をいただきました。観覧をご希望の方は、事前にお申込みが必要となります(先着順)。

- ▷日時 10月19日(金)
開場 18時 開演 18時30分
- ▷会場 福島県文化センター(大ホール)
(福島市春日町5-54)
- ▷出演者 ●いっこく堂
●谷本賢一郎
●涼風
- ▷入場料 無料(ただし、招待券が必要です。)
- ▷招待枚数 300枚限定
(先着順となります。1人につき1枚をお願いします。)
- ▷申し込み条件
 - ①事前に申し込みを行い、指定された期間内に招待券を自ら取りに来庁できる方(発送はできません。)
 - ②浪江町民であること。
(当日、入場の際に身分証をご提示いただく場合があります。)
- ▷受付開始日時
8月7日(火)9時~10日(金)16時まで
(ただし、数になり次第終了。)
- ▷受付時間帯 9時~16時



- ▷受付専用ダイヤル
Tel 080-5737-2031・Tel 080-3331-3505
(つながりにくい場合がありますが、公平をきすため、他のダイヤルでの申し込みはできません。)
- ▷招待券引き換え期間
8月14日(火)9時~17日(金)16時まで
(期間内に来庁できない場合、申し込みは無効となります。)
- ▷引き換え場所
 - 浪江町役場二本松第二事務所 1階
(二本松市郭内1丁目81)
 - 福島出張所
(福島市五老内町3番1号 福島市役所9階西側)
- ▷主催 株式会社 Minoru Music Company

問 生活支援課避難生活支援係 Tel 0243-62-0305



栃本 益雄さん(室原)

取材者：元気玉プロジェクト 榎木
取材日：7月11日

人の縁を大切にして、残りの人生を笑顔で



▲猪苗代町の住まい前で奥さまのシスエさんとともに。

現在は猪苗代町の一軒家に奥さまと2人暮らしの栃本さん。おきてしまった災害にくよくよせず、残りの人生に楽しみをみつけながら、笑顔で過ごしていきたいと考えていらっやいます。

浪江町では、曾祖父の代から酪農を営んできました。娘の結婚を期に若夫婦に農場を譲って引退し、ときどきは牛の世話を手伝いながら、趣味の詩吟やカラオケを楽しむ日々を過ごしていました。震災当日も、カラオケ好きな近所の人たちが集まり自宅で歌っていました。大きな揺れに、座ったまま互いに支えあうのが精一杯でした。

翌日、家の前の国道は隙間もないほど車の行列ができ、それ

が3日間続きました。私は歳のせい或少々耳が遠いためラジオも持っておらず、防災無線も聞こえなかったため、地震の後に浜へ津波が押し寄せた事も知らずにいたのです。せいぜい4、5日もすれば落ち着くだろうと思いい、なにより50頭程いる牛の世話がなかったので、避難せずに自宅で生活をしていました。自家発電もあり、水は裏山の湧き水を使っていたので不自由はありませんでした。毎日300リットルもの牛乳を搾っては捨てていました。

10日ほど過ぎたころ、自衛隊の車が私たち家族4人を迎えて来て、すぐに避難するようにと言うので、わずかな貴重品だけを荷物を持って避難しました。二本松市の避難所で放射能の検査を受け、心配して集まっていた親戚や友人・知人の話で、ようやく状況を把握することになったのです。

二本松市針道の避難所で2日間生活しましたが、寒さが厳しく、身体が思うように動かせなくなっていたので、嫁いだ娘を頼り茨城県へ避難しました。一変し



明治 輝子さん(幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山、土谷
取材日：7月11日

畑を耕しながら、心も耕しています

大震災当日、瓦が流れ落ちるように崩れる公民館から自宅に戻ったものの、津波から逃れるために、直ぐに時雨の降る寒い中を車に毛布3枚だけを積み込み、ご主人と愛犬と一緒に町外れに避難。翌日には原発事故が起こり、原町を経由して川俣へ向かい、スーパーの駐車場で更に一夜を明かしました。13日には福島市へ。市内のアパートでの避難生活を経て、昨年夏、伊達市保原の戸建て住宅に移り、今は庭や畑仕事を楽しみながら暮らしていらっやいます。

■差し入れの温かいおにぎりに、人のありがたさが心底浸み込みました。

福島市に避難しアパートを借りましたが、着のみ着のままの寒い夜が何日も続きました。そうした不安な日々の中、近所の女性が温かいおにぎり、お味噌汁、煮物に漬物などの三度三度の食事を、私たちの生活が整うまでの3週間余り届けてくださいました。その上、お風呂までいただきました。誰も知り合いない見知らぬ土地での親切に、ただうれしく、感謝しながら家族で涙しました。

大震災が発生するほんの数日前、浪江町のサンシャイン浪江で行われた「親鸞」についての講演会で聴いた「明日ありと思ふ心の仇校。明日はあらしが吹かぬものかは」という一節が忘れられません。この世の中で、このような豊かな文化に浸りながら、まさかこんな出来事が起きるはずもないと信じ切つて過ごしてきました。しかし、この大地震と津波、追い打ちをかけた原発事故の恐ろしさに驚き、折れかかった当時の心に、この

教えが深く深く刻まれました。

■浪江を想いながら、保原での暮らしを充実させています。

夢なら覚めてと祈りながら、その日その日暮らしの1年余りは瞬間に過ぎました。先の見えない生活に対し、不安がいっぱいの日々ではありませんが、この保原は母の故郷です。近所の方々と触れ合いながら、少しずつ私流の生活を取り戻しています。

旅の好きな私は、ときどき夫とともに車で近所の温泉に行ったり、遠出をしたりしています。また、趣味の仲間と集まり、楽器を奏でる心のゆとりも持てるようになってきました。

家では、何より好きな庭いじりや愛用の耕運機で野菜作りをしながら、気持ちの良い汗を流しています。今では、種から育てたきゅうり、トマト、トウモロコシなど十数種の野菜が育ち、収穫を楽しみにしています。庭にはミニ枯山水、噴水を設え、今は球根で植えた鉄砲百合の香りが漂って、元気づけてくれます。また、早咲きの町の花、コスモ



▲ご主人と愛犬のはなちゃん、丹精込めた畑。大好きなものに囲まれて。

スも咲き出しました。

浪江の家や庭のことを思い巡らすと寂しい気持ちになります。遠く離れていても、あの請戸の潮の香りや緑の大地など、思い出が山のように積もった故郷を思い出しながら、支え合つて過ごしています。

そして、あちこちで浪江の皆さまの素敵な笑顔に会えますように。



新潟県

櫻庭 憲裕さん(川添)

取材者：くびき野NPOサポートセンター 野本
取材日：7月9日

子どもたちの安全を確保できる場所に、復興の拠点を



震災当日は、福島第一原発で勤務中だったという櫻庭さん。避難指示以降、家族らとともに郡山市の避難所を経て、一時は両親の実家である秋田市に身を寄せました。その後、職を求めて新潟県柏崎市に転居、妻の貴子さん、高校生の杏奈さん、中学生の乃彩さんの4人家族で生活しています。

地震の後、会社から家族の安全を確認するよう指示があり、同じ職場にいた妻と必死の思いで自宅を目指しました。道は所々寸断され、津波によって迂回しなければなりません。何とか自宅には辿り着きましたが、いわき市に外出していた高校生の娘の安否がわからず、気が気ではありませんでした。そんな状況で12日朝に避難指示があり、着の身着のまま、家族、親戚、友人らと一緒に浪江を飛び出しました。幸いにも、いわき市の避難所にいた娘は、私たちのもとに向っていた知人の車に乗乗することができ、翌日には再会することができました。このときばかりはほっとしました。

その後、原発から距離をとった方がいいと判断し、渋滞の中、郡山ビッグアイの避難所に向かいました。そこには200人程の避難者がいましたが、放射能が室内に入り込む危険から、暖房も使えなかつたので寒く、とても辛かった。その上、当時まだ、私たちと郡山の人たちとは、原発事故に対する危機意識に差があつて、どうにも長居しづらい雰囲気でした。

みんなで相談した結果、16日朝から家族ごと別の場所に避難することにになり、私たちは両親の実家を頼って秋田市に向かいました。途中、新潟県の温泉宿で久しぶりの風呂に入れたことは良かったのですが、ガソリンの販売制限でずいぶん補給に苦労しました。日本海の横なぐりの雪の中、もう家に帰ることとできないかもしれない、という不安に駆られたことを思い出します。

秋田市では約2カ月間、避難生活を送りました。なかなか仕事にも就けず、娘たちにも「これから先どうなるのか？」という不安が募つていたと思います。そんな中、このままでいいけない、何とか仕事を見つけなくては

はと思い、会社の勧めもあつた新潟県柏崎市に職を求めました。市内の空き家に入居し、今年の3月まで柏崎刈羽原発の耐震補強工事の現場で働いていました。しかし正直なところ、土地勘もまったくない場所です。将来のことを考えていくのは難しいと感じています。娘たちの進学や就職のこと、自宅のこれからの対応なども考えると、やはり福島県内に一刻も早く戻りたい。ただその一方で、放射能への不安は拭いきれません。大切な娘たちの安全だけは確保しなければならぬと思つています。

浪江でサーフィンやライフセーバーをしていたことを懐かしく思います。浪江の海にはいつも良い波があつた。原発事故さえなければ、すぐにも復興に取りかかれるのに。故郷の海を奪われてしまった悔しさを感じます。

仮の町構想には希望を持つていますが、できる限り放射線量の低い場所に候補地を選んでほしいです。そしてその上で、経過を見ながら帰町する、しないの選択肢を私たちに与えてもらいたい。それが今の願いです。



埼玉県

黒坂 信一さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：7月7日

浪江町の復興を願って、今を前向きに

黒坂信一さんは、妻の佐津樹さんと3人の子どもたちと埼玉県の借り上げ住宅で生活しています。震災前の4世代同居の暮らしから、親子5人の暮らしにと生活は大きく変わりました。

浪江では、両親と祖母、私たち夫婦と子どもたち3人の8人で暮らしていました。津島の避難所に1泊した後、親戚を頼って3月15日に埼玉に来ました。親戚宅に10日間ほど居候した後、両親と祖母は福島に戻り、今は借り上げ住宅で暮らしています。私たち夫婦と子どもたちは、私の仕事の関係や子どもたちの学校のことを考え、埼玉での暮らしを選びました。今、住んでいる家は埼玉県の借り上げ住宅で、



▲左から流星くん、美桜ちゃん、心夢ちゃん、佐津樹さん、信一さん

昨年の8月に越してきました。長男の流星は中学3年生、長女の美桜は小学6年生、次女の心夢は小学2年生です。昨年4月から、近所の学校にそれぞれ編入学しました。埼玉での暮らしで一番の心配は、子どもたちが学校に慣れてくれるかどうか、友だちができるかどうかでした。特に、長男の流星は、避難してきたときは中学2年生、高校受験の準備をしなければならぬ時期で、とても不安でした。

ここでの暮らしももうすぐ1年。私たちの不安をよそに、子どもたちは学校になじみ、友だちもできたようで、ほっとしています。妻の佐津樹は、子どもたちも頑張っているのだから、自分も何か始めなければとPTAの役員を引き受け、忙しくしているようです。先日、妻は、長男の流星に「この暮らしは楽しいの？」と聞かれ、「うん、映画館にも行けるし、買い物も便利だし、楽しいよ。浪江ではできないことが、たくさんできるじゃない。」と答えたそうです。子どもたちを励まし、支えてい

くためにも、状況を受け入れ、今の暮らしを楽しむことを大事にしなればと思います。

今年の3月、二本松市で「ふるさと学級」が開催されました。県外に避難している子どもたちも含めて、おおぜいの小中学生が集まりました。子どもたちは久しぶりに同級生と会い、とても楽しそうでした。離れてみて、浪江には、豊かな自然と人の交流があつたなと改めて思います。山で採れたきのこやびわ、いちじくをご近所の方からいただいたり、山の紅葉を楽しんだりといったことが思い出されます。

震災後、心が折れそうになったこともありました。私たちと同じように、県外に避難した浪江町の人たちとお会いし、暮らしの苦労をお聞きすることもあります。慣れない土地での暮らしで、大変なことはたくさんあります。でも、ふるさと浪江に帰れる日が来ることを願って、みんなの前を向いて一緒にがんばっていければと思つています。



松本 静枝さん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：7月14日

いわき市に住居物件を探しています



▲右が静枝さん、左が繁夫さん

昨年3月末に仙台市に避難された松本さん。現在は、仙台市太白区で夫の繁夫さんと2人でアパートに暮らしています。近くに住む娘さん家族と行き来しながら、日々の生活を歩んでいます。

■ようやく落ち着き始めた日々
浪江町川添中上ノ原地区に住んでいて、地区内では近所づきあいを日々させていたっていました。老人会の活動やゲートボール、お茶飲み会、自治会活動など、地域のみんなとの楽しみがたくさんありましたよ。夫も畑仕事やシルバー人材センターの仕事で日々充実していました。でも今は、仙台暮らし。知らない人ばかりですし、道路や場所もよくわからず迷ってばかりで

■桑折町の仮設住宅の友人を訪ねて
避難先では、友人や知人と話す機会がなかなか無いので、先日、浪江町の方が多く避難している桑折町の仮設住宅に行ってきました。10人くらいの方が集まってくださり、思い出話やこ

にオープンされた交流拠点で、私は昨年12月からスタッフとして活動に関わっています。私にとって『和』は、心のよりどころであり、京都の家族のような存在です。
浪江町では、仕事のかたわら、食育アドバイザーの資格をとり、食育に関わる活動をしていました。あの震災の日もちょうど教室を開いているときでした。
ここ京都で、たくさんの方に助けてもらった私ができることは何かと考えたときに「食育の活動しかない」と思いました。
『和』では、8月下旬に、復興支援のアンテナショップをオープンします。そこではスタッフや被災地の方々がつくった雑貨の販売をしたり、食の安全・安心と手作りにこだわった食事(おにぎりやランチ、デザート)を提供したりする予定で、私も中心メンバーとして関わることになっていきます。
「事実1つ、考え方は2つ」。これは、事実をどのように捉えるかによって自分の人生を変えることができるかと教えてくださった私の食育の先生の言葉です。

す。先日は住まいの近くの駐車場にいわきナンバーの車を見つけてきました。「どんな方が車乗っているのかな？」なんて考えたり…。こんなことがある度に、浪江での暮らしを懐かしく思い出します。
震災後とはいうと、直後の3月中旬には富岡町に住んでいた私の母が亡くなりました。避難しながらの葬儀や供養、相続などの手続きはとて大変で約8カ月ほどかかりました。この間は体力が無くなり、じんましんが出たりして気が滅入る日々でした。その後は、夫の病気が検査で分かり5月に入院。2週間弱で退院し、現在では元の調子を取り戻しつつあります。そんな感じでしょうか。落ち着きはじめてるところです。

■今後について夫婦で相談
夫婦で相談したのですが、今後はいわき市に住みたいと考えています。その準備のために、先日現地に行ってきました。その物件の空きが見つかったら連絡をもらえるようお願いしてきました。いわき市の物件は空気がなかなか出ない、と言われています。ですが、なるべく暖かいところ、そして知人や親せきが住んでいる場所で暮らしたいと考えています。今までは、娘夫婦、息子夫婦の近くに住み互いに行き来し助け合ってきましたが、今後は夫婦2人で暮らしていくことにしました。



布施 元子さん(北幾世橋)

取材者：きょうとNPOセンター 田口
取材日：4月6日

私にできることを、私らしく、実践していきたい



▲布施さんと長男・光之輔くん(2歳)

布施さんは、浪江町で食育アドバイザーとして活動されてきました。避難先の京都でも「食」を通じた活動を展開し、交流の輪を広げています。

昨年4月17日、主人と私、そして当時1歳だった息子の3人で京都に避難して来ました。家族や親戚、知り合いが誰一人いない土地での生活には不安もありましたが、温かい出逢いに恵まれました。中でも「福興サロン和 nagomi」(以下、『和』)で出逢った方やスタッフの皆さんからは、本当に大きな支えと生きる勇気をいただきました。

「和」は、東日本大震災で被災し、京都に避難してこられた方々と支援者の方々、ともに少しでもほっとしたり、気軽に仲間と集えたり、情報交換をするための場所として、昨年10月

にオープンされた交流拠点で、私は昨年12月からスタッフとして活動に関わっています。私にとって『和』は、心のよりどころであり、京都の家族のような存在です。
浪江町では、仕事のかたわら、食育アドバイザーの資格をとり、食育に関わる活動をしていました。あの震災の日もちょうど教室を開いているときでした。
ここ京都で、たくさんの方に助けてもらった私ができることは何かと考えたときに「食育の活動しかない」と思いました。
『和』では、8月下旬に、復興支援のアンテナショップをオープンします。そこではスタッフや被災地の方々がつくった雑貨の販売をしたり、食の安全・安心と手作りにこだわった食事(おにぎりやランチ、デザート)を提供したりする予定で、私も中心メンバーとして関わることになっていきます。
「事実1つ、考え方は2つ」。これは、事実をどのように捉えるかによって自分の人生を変えることができるかと教えてくださった私の食育の先生の言葉です。

震災のこと、原発のこと…事実は変わりませんが、捉え方や考え次第で、生き方をよりよく変えていくことができると思います。食事ができること、電気が使えること、車に乗れることなど今まで当たり前だったことがすべて「ありがたい」ことなのだと思ってきました。その感謝の気持ちを胸に、この夏にオープンするお店で今度は私が新しい出逢いの場を紡いでいけたらと思っています。



▲『和』のスタッフの皆さんと一緒に。
左から阿部温子さん(福島県からの避難者)、布施さん、大塚茜さん(理事)、瀧澤佳世さん(埼玉県からの避難者)



雪 光希くん(小5)(川添)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：7月15日

今はたくさん友だちを作って元気に頑張っていく —いつか浪江に帰って友だちと会いたい—

雪 光希くんは、妹の実里ちゃん(小4)とお母さんと3人で埼玉県所沢市の借り上げアパートで生活しています。現在の小学校には、震災直後の4月から通学し2年目を迎えています。今回の『浪江のこころ通信』の取材は、光希くん本人の希望で実現することになりました。



▲光希くん(左)と妹の実里ちゃん

地震のあと、津島に逃げようと思ったけれど、津島への道が大渋滞だったので、僕たちは飯舘村に避難しました。そのあと、親戚を頼って所沢市にきました。転校した小手指小学校は浪江小学校と同じくらいの生徒数です。友だちもたくさんできました。近くの公園などで、サッカーや野球などをして遊ぶことが多いです。いまの学校はとても元気が多い学校で、友だちとは外で遊ぶことが多いです。埼玉の夏は暑いんです。近くに

ある西武ドームに、大好きなプロ野球を見に何度か行きました。楽天ファンなので、楽天戦を見に行きました。そこで浪江小の同級生に偶然会いました。やっぱり浪江小の友だちに会いたいなあと思います。今どんなことをして遊んでいるのか。どんな生活をしているのか聞いてみたいです。そしていつか福島に帰りたいです。

浪江では夏によく友だちと虫取りに行きました。クワガタ虫やカブト虫をよく取ったけど、こちらでは見かけません。十日市も行きました。出店で食べた、知り合いの友だちにもたくさん会ったりしました。にぎやかで人がたくさん集まっています。請戸の砂浜で遊んだりもしました。思い出すと浪江が懐かしいです。妹の実里も、埼玉ではできない雪合戦や雪だるま作りを、また浪江の友だちとしたいなと思っています。

秋田で暮らしていた浪江小で友だちだった稲垣颯一郎くん『通信』をみて、僕も取材をしてほしいと思いました。理由は、今自分が思っていることを伝え

たかったから。浪江の友だちに直接会って話すことはできないけれど、『通信』に出れば自分が元気であることを伝えられると思ったからです。いま通っている小学校で、できるだけ友だちを作って仲よく元気に行きたいです。浪江の友だちにも、同じように元気で頑張っていきたい。そうしていれば、いつか必ずみんなに会えると信じています。そしてできるだけ募金などで協力して、福島で困っている人を助けてあげたいと思います。

お母さんは、これからのことや福島に残っている知り合いの人たちのことを思うと、ときどき考え込んでいます。僕たちのことを心配してくれているお母さんに、いつか恩返しをしたい。その日が来るまで、元気に明るく頑張っていく予定です。



西原 志織さん・西原 清さん(川添)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 小原
取材日：7月14日

やっぱり福島はいいところ、福島県民はいい人

西原さんご家族は、ご夫婦と3人の息子さん、おじいちゃんの6人で生活をともにしています。以前はつくば市に住んでいましたが、旦那さんのお仕事の関係で4月に北茨城市に移りました。おばあちゃんは残念ながら5月に亡くなりましたが、たくさん友だちに見送ってもらいました。3人の息子さんは戦隊ヒーローやアニメが大好きです。

■志織さん

浪江町は海も山もあり、気候も良くすてきな街です。震災がなければ今ごろ、高速道路も開通していたでしょう。新築して3カ月の二世帯住宅を楽しみながらも、避難生活となってしまったことが非常に残念です。

避難当初は、すぐに帰宅できると思っていたので着の身着のまま、体育館を転々とし、私の実家がある茨城県の守谷市に避難しました。車中では、子どもがストレスで吐いてしまっていたのでとても心配でした。

その後は、常総市のあるなるの里という所に1カ月くらいいました。そのスタッフの方々には、とても良くしてもらい、今でも連絡を取り合っています。

その避難所が閉鎖した後、つくば市のホテルに移りました。そして近くの県営住宅へ入居し、今年の3月までそこで生活していました。つくば市では、福島県の交流会に参加したり、いろいろな人とも出会うことができました。今も夫の仕事の関係で北茨城市に住ん

でいます。福島県に近くなったことでほっとした気持ちがあります。これからのことは、夫の事業再開の場所を考えて決めていく予定です。

■清さん

過去ばかり振り返っていても仕方ないから、前向きにいかないと。これからどうするかが大切。家にこもりきりでは、気持ちがおかしくなってしまう。妻が5月に亡くなり、新盆が終わるまでは気持ちが落ち着かないけど、落ち着いたらボランティアでもしたいと思っていますし、交流会などにも、なるべく出て行こうと思っています。

このあいだ用事があつて郡山市に行ったとき、その場に降り立った瞬間になんだか空気がおいしいように感じました。やっぱり福島県はいいところだし、福島県民はいい人たちばかりです。

元に戻るなら、家の周りを散歩したり、普通の生活がしたいです。仲間内とも会って話したいですね。



▲左から、おじいちゃんの清さん、志織さん、旺祐くん、圭祐くん、侑祐くん
3人の息子さんはテレビの戦隊ヒーローに釘付けで、最後までカメラと目線が合わず・・・残念